令和元年度 佐賀県立武雄青陵中学校 学校評価結果

1 学校教育目標 高い志と未来を切り拓く力持ち、地域や国際社会の発展に貢献できる、人間性豊かな人材を育成する。	2 本年度の重点目標 高い志を育てながら、自ら学びに向かう姿勢を持つ生徒を育成する。 ・学力向上と進路支援 ・生徒指導の充実 ・中高交流の促進 ・保護者・地域との連携 ・組織力の向上、迅速・誠実・的確な問題解決、時間外労働時間の削減
---	---

達成度 A:ほぼ達成できた
B:概ね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

資料2

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む。

3 目標・評価

① 学力向上

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●学力向上	・指導計画 ・評価計画	・わかる授業・学びのある授業を展開するための計画を策定する。	・指導と評価の一体化が図れる指導計画及び評価計画を実現性を十分に考慮して策定する。	A	・指導計画及び評価計画を作成し、これに基づき概ね実施できている。	・新学習指導要領等を見ながら改善を図っていくべきものであり、指導と評価に関しては、日常的に考えておく必要がある。
		・学習環境	・個に応じた指導ができる環境をつくる。	・TTや習熟度別指導を適宜取り入れるなど、学力差が広がらない工夫を講じる。	A	・1年生の英・数学・理科、3年生の英数で、TT授業や習熟度別指導を行い、学力差が広がらない工夫を行った。	・今年度の指導方法を継続し、教科担当者間での話し合いや教材研究に時間をかけ、さらに効果的な取り組みを行う。
		・授業改善	・多様化する生徒に対し、自ら考え取り組む、主体的な学習が身につくよう、全教科を通じて指導を行う。 ・「基礎学力」とともに「学び方の基礎基本」を徹底的に習得させる。	・「めあて」を明示する。 ・授業を振り返る場面を設定する。 ・個別演習、グループワーク「学び合い」、アクティブラーニングなどの多様な展開を活用する。 ・思考力・判断力・表現力を育む発問や課題を取り入れる。	B	・授業の内容や進度によって、各教科で様々な工夫を取り入れ、授業をすすめることができた。	・新学習指導要領や大学入試共通テストへの対応等、常に授業改善を図っていく必要がある。
		・授業外の指導改善	・多様化する生徒に対し、自ら考え取り組む、主体的な学習が身につくよう指導を行う。	・能力に応じて学力向上が図れるような補充指導を実施する。(例:青陵タイム、サポート学習会、土曜ハイパードラマ等)	B	・3年生の上位層に対する補習授業は充実させることができた。 ・全学年で、サポート学習会を通して下位層への対応を行った。	・1、2年生で上位層への個別対応の必要性について今後も検討が必要。 ・成績下位層への声かけや意識付け、「学び方」をどのように学ばせるかについて、今後も検討が必要である。
		・家庭学習	・家庭学習が充実するよう指導を行う。 ・家庭学習を始める時間(三点固定)を習慣化できるように継続的な指導を行う。	・授業と関連付けた課題を与える。 ・宿題の意味ややり方を具体的に指導し、次の学びにつながることを理解させる。 ・課題の量と重さについて、教科間での調整を行う。	B	・生徒に対し、家庭学習や三点固定の重要性は説くことができたが、課題の与え方や内容、そして日々の課題については、今後も継続的な試行錯誤が必要。 ・長期休みに関しては、教科間での調整ができた。	・課題のあり方に関しては、質や量ともに、教科間の共通理解の上、今後も調整が必要である。 ・ゲーム依存の問題も、今後の課題となるので、保護者との連携が必要になる。
		・学習評価	・適正な評価の実施として、観点別評価の積み上げによる総合評価を確立する。	・評価計画を生徒及び保護者に配布し、学習評価について理解を深めてもらう。 ・評価結果について説明責任が果たせるよう、適宜評価方法や評価時期の検証を行う。	A	・各教科担当で、総合評価を行っている。評価結果の検証について更に研究をすすめる。	・評価計画の作成と生徒への周知については、これまでどおり行う。総合評価については、教科内、教科間で検証を行えるようにしたい。

② 進路支援の充実

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○キャリア教育	●志を高める教育	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・将来の夢や目標の実現に向けて、興味・関心を高め、主体的に自己実現に関心する姿勢を培う。	B	・教職員間の相互授業参観を実施し、多くの体験活動的な学習内容が実践されたが、教科横断的な部分には至っていない。 ・「目標⇒実践⇒検証」のサイクルによる成功体験を多くの生徒に実感させ切れていない。	・今年度は教職員間の相互授業参観を2学期に実施したが、検証⇒計画までの期間が短かったため、次年度は1学期から実施し、互いの実践が共有できるシステムの構築が必要である。
		・探究活動	・将来にわたる自己の在り方・生き方について考え、主体的に進路を決める姿勢を培う。	・調べ学習やディスカッションを取り入れるなど、「探究」の時間を充実させる。 ・教科横断的・総合的な視点を持って活動を行う。	A	・キャリア教育のアンケートでは、「自分の進路」について83.3%の生徒が肯定的な回答を返している。 ・学年主体で活動することが多く、教科横断的・総合的な視点に達していない部分が多かった。	・今年度、教職員間の相互授業参観を実施したことで、教科間の指導の違いやよさについて多くの教員が学ぶことができたので、今後も継続し、それらのよさを探究活動の場に応じて話し合い、取り入れていくことが必要である。
		・体験活動	・職業観、労働観が身につく、又は身につけようとする。 ・高校進学後、文理選択や進路目標の設定を主体的に行えるようにする。	・外部講師を活用した職業講話、職場体験、職場見学、また職業調べ等を実施し、仕事や働く意味について考える契機とする。	A	・キャリア教育のアンケートでは、「働くことの意義」について92%の生徒が肯定的な回答を返している。 ・カードゲームを用いたSDGsワークショップを実施し、これからの世界的課題について、興味・関心をもち取り組めた。	・今年度、地域や国際社会に貢献できる人材を育成するために、SDGsの考えを導入できたので、次年度以降もその方向性を継続する。今の体験活動は充実しているが、新しいことを取り入れる際は、検証に基づき廃止する判断も必要である。

③ 生徒指導の充実

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・読書活動の推進	・豊かな心と高い志を育成するため、良質な本に多く触れる機会を作る。	・学級内での広報紙活動を充実させる。 ・校内放送による新刊案内、図書便りの学級指示を行う。	A	・学級文庫の充実により、学級内における読書啓発ができた。 ・図書便りの掲示、校内放送による新刊案内により図書利用者数、貸出冊数増加につなげることができた。	・学級文庫を充実させることはできたが、本の管理が徹底していなかったため、管理方法を明確にして、学級内での本の管理を徹底する。
		・礼儀作法とマナー	・本校生としての誇りを持ち、正しく行動するための社会的常識、判断力を養う。	・登校指導をはじめ日常的に挨拶指導や言葉遣いの指導を行う。 ・学校生活のあらゆる場面を通して、社会的常識や正しい判断力ができるよう考え、行動させる。	A	・多くの生徒が明るく元気な挨拶や適切な言葉遣いなど規律を守りながら、落ち着いた学校生活を送っている。しかし、登下校時の公共の場におけるマナーの厳守については課題である。	・日常の学校生活や集会等で公共のマナーについて意識を高めるような指導を行う。 ・生徒会活動において、周囲の状況に応じた正しい判断や行動がとれるようになるための主体的な活動について工夫させる。
		●いじめの問題への対応	・相手のことを考え、正しい判断や行動ができるようになる。 ・いじめの予防、早期発見、早期解決に努める。	・相手のことを考え、正しい判断や行動ができるようになる。 ・いじめの予防、早期発見、早期解決に努める。 ・いじめ・体罰等対策委員会において、事業発生時の対応について共通理解を図り、また教職員全体でも共通理解を図る。	B	・定期的アンケート、教育相談を行い、行動観察を通して生徒の実態把握に努めた。 ・いじめについては、今年度8件の認知を行い、学校として積極的に対応し、解決した。 ・他者への配慮に欠ける言動に対しては、毅然と指導を行った。 ・生徒指導便り発行し、いじめの定義について確認を行った。しかし、いじめ発生件数を0にはできなかった。	・通常の学校生活での観察はもちろんであるが、アンケート、面談等により、生徒の状況を把握するとともにいじめの早期発見、早期対応できるよう取り組む。いじめ事案が発生した場合は、被害にあった生徒に寄り添い、組織として迅速かつ適切な対応ができる体制づくりを行う。

④ 保健・安全指導の充実

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	●健康・体づくり	・望ましい生活習慣の形成	・3点(起床、学習開始、就寝)固定を定着させる。 ・朝食摂取率を95%以上にする。	・SDノートを用いて生徒の生活実態を把握し、教育相談などを利用して適切に指導・助言を行う。 ・朝食の摂取状況について調査し、食育だよりや保健だより等で朝食の大切さについて呼びかけるとともに、保護者への協力を依頼する。	A	・各担任によるSDノートチェックから、生徒の生活状況、及び心理状態などの把握ができ、生活指導や教育相談等に活用することができた。 ・月一度の「食育だより」の発行により、季節ごとのタイムリーな情報を発信することができ、朝食摂取率は95.5%を達成することができた。	・今後も、食の大切さなど情報を発信し、朝食摂取率100%に近づける。
		・自己管理	・健康に対する意識を高め、健康の保持・増進に努める。	・生徒会保健委員会活動と協同し、自己健康管理を促す取り組みを行う。 ・健康増進を図るため、健康診断の結果をもとに個人指導に努める。 ・「保健だより」発行などを通して、身近な保健情報を提供する。	A	・生徒会保健委員会からの「保健便り」の発行や、放送による感染症予防啓発などの活発な活動を通して、自己健康管理意識を高めることができた。その結果、今年度の学級健康度は1クラスもなかった。 ・健康診断の結果をもとに、生徒への通知を確実に行った。 ・毎月「ほけんだより」を発行し、保健情報を家庭に提供することができた。	・朝の健康チェックを各自で確実にし、自己管理意識を高める。

⑤ 業務改善を図るとともに、情報発信、地域との連携に努め、開かれた学校づくりを推進する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策	
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・校務等の効率化の推進	・学習指導をはじめとした学校行事全体の運営について改善と工夫を重ねながら、効率的、効果的な学習指導、生徒指導、部活動指導に努め、教職員の時間外労働時間については、所属年間平均時間を45時間未満にする。 ・学校行事の開催にあたり、昨年度より10%の改善を目指す。	・学校教育活動をより効果的にかつ継続可能な形で行うために、個人ではなく組織的に各指導にあたる。 ・部活動指導においては、本校の部活動の在り方に関する基本方針に則りその履行に努めることで、教職員の負担軽減につなげる。 ・年次有給休暇、振替休日等の取得を推奨する。	A	・学校教育活動の組織的な遂行については、昨年度よりは進んだと思われるが、まだ十分とは言えない。 ・時間外勤務の削減のため、部活動の計画段階から、休業日の適切な設定をはじめ、時間対効果意識した業務の推進を推奨した結果、1月末の時点で、時間外労働時間の所属平均は41時間となっている。 ・年次有給休暇については、わずかながらあるが、取得日数が増加した。また、振替休日についても、積極的に取得している。	・学校教育活動の組織的な遂行を更に進め、校務の効率化及び継続性を図りたい。 ・時間外勤務の削減を更に進めるため、行事の見直し、職員が担うべき業務の選別、部活動指導員事業の継続的活用等を行う。	
		○保護者・地域との関係	・情報発信	・学校だよりやホームページ等により学校の活動について積極的に広報活動を行い、学校への理解を得るよう努める。	・学級通信や「青陵だより」の発行とおして、地域や関係小学校へ情報発信の拡充に努める。 ・ホームページの更新を定期的に行い、外部の方々への青陵中学校に対するよりよい理解を促進し、たくさんの魅力が伝わるようにする。	A	・学級通信は、大きな節目に発行できた。昨年度までの、「青陵便り(紙媒体)」の発行は、ホームページ更新をこまめに発行することで代替し、その更新数は2月まで「87」に達することができた。	・今年度同様、HPによる情報発信を積極的に推進していきたい。
		・開かれた学校づくり	・学校行事や公開授業などに1回でも参加した保護者の数を80%以上にし、学校理解を深化させる。 ・地域に信頼される学校づくりを行う。	・保護者が参加可能な学校行事の案内を行い、PTA役員との協力により保護者への参加を促す。 ・地域や地元自治体のイベントに参加し、また地域への奉仕活動を実施する。	A	・学校行事の予定については、学校ホームページやプリント配布を通じ予告し、来校の予定を立てやすいように配慮した。PTA総会への参加率は77.3%であったが、その後行事を含め、80%を超える保護者に来校いただき、学校理解を図れた。 ・地域や地元イベントへは、生徒は積極的に参加した。	・地域の方と共に行事を行うなど、今以上に地域との関わりを密に行い、さらに地域に愛される学校づくりを目指す。	

⑥ 中高交流の促進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	○中高一貫教育	・中高交流の促進	・中高生が日常的に交流することができ、理解を深め、機会を増やし、生徒自ら学びに向かう姿勢を持つ校風の醸成を促進する。 ・中高職員の交流を深め、中高の課題を共有し不断に改善を図ること、6年間を通した効果的な教育活動の仕組みをつくる。	・ジョイントスタディや高校体験授業等の中高生の交流により、生徒自ら学びに向かう姿勢が醸成されている。 ・中高職員の特に同教科間の交流により、教科における指導課題を発生し、効果的な教育活動につながっている。	B	・中高生が日常的に交流できる機会を設けることはできなかったが、ジョイントスタディや高校体験授業等の交流により、90%以上の生徒たちはいい刺激を受け、目標を設定する等、自ら学びに向かう姿勢が高まった。 ・11月に全ての教科において、中高相互の授業参観及び相互研修会を行い、中高6年間を通した指導の在り方を話し合った。	・部活動未加入者や高校3年生で、進路が決定した者が、中学生に勉強を教えに来る等、引き続き中高生が日常的に交流できる場所、機会を増やしたい。 ・ジョイントスタディや高校体験授業については、90%以上の生徒が、有意義だと感じているが、内容の改善や回数の増加を検討したい。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	○グローバル化	・国際交流	・積極的に国際交流に取り組み、異文化理解、異文化理解に努める。 ・英語によるコミュニケーション能力が向上する。(英検2級・準2級を合わせて70名以上、3級を100名以上に)	・「探究」の時間を活用し、国際交流の機会を設ける。 ・海外の学校との交流活動を県との協力で充実させる。 ・様々な国際交流事業を紹介し、積極的な参加を促す。	A	・今年度、武雄高校合同オーストラリア語学研修に本校から9名参加予定だったが、感染症対策で中止になり残念だった。 ・英検合格者は、2級11名、準2級68名、3級72名である。2・準2級は目標を達成することができた。来年度も同様の取り組みを実施していきたい。	・国際社会の発展に貢献できる人材育成のためにも、国際交流活動の一層の充実を図りたい。 ・英検については、準2級以上を70名、3級以上を100名以上を引き続き目標とする。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

学校教育目標の実現に向け、武雄青陵中学校年間指導基本計画をもとに、各教科分掌及び学年を中心に、保護者や地域の協力を得ながら、学校全体で取り組んだ。本校教育目標のキーワードの1つである「高い志」を持てるような学びの機会を設定し、その中で自ら考え判断し行動できる資質を育みながら学びへの意欲を刺激し、高い学力を育てる教育活動を行った。次年度は、2021年からの新学習指導要領を見据え、生徒が自立し、社会に貢献できる力を身につけられるような教育実践していきたい。いじめ問題については、外部から人を招いての講演会や校内でも話しを行うなど、昨年度以上に防止に努めてきたが今年度8件のいじめ認知を行うこととなった。そのつとチーム体制で適切な指導を行うことはできたが、被害者が出ないように未然防止にさらに努めていきたい。今年度、多様な要因により、登校に支障を来す生徒が増えたが、十分な対策を講ずることができず、次年度の課題となった。昨年度課題として残った、HPの更新を滞りなく計画的に行う点については、更新数の増加に比例し閲覧数も増加し、本校学校評議員や保護者からも高い評価を得ることができ、学校教育活動の広報を効果的に行えた。次年度も是非継続し、さらに開かれた学校となるよう努めたい。武雄高等学校と協働して中高一貫教育校として、密接な連携を図りながら、高い志をもち自ら学びに向かう姿勢を有する生徒を育成する。

●は共通評価項目、○は独自評価項目